富田林市文化芸術振興ビジョン策定委員会　第４回　議事録

日時	：令和５年２月２７日（月）　14 時 00 分～16 時 00 分
開催場所	：富田林市きらめき創造館（Topic）２階　グループ活動室
委　　員	：中脇（委員長）、中野、花柳、山本、飯田、金、岡、塩見、森下 ※敬称略
オブザーバー	：西村（以上、（公財）富田林市文化振興事業団）
事務局	：坂本、正木、黒川（以上、富田林市） 江藤、有田（以上、㈱地域計画建築研究所）
傍聴者	：４名

〇会議次第

1．開会

事務局　：（開会挨拶）
　　：（会議公開の説明）
　　：（配布資料の確認）

2．第 3 回委員会の議事録の振り返り

事務局　：（資料１・２　説明）
委員長　：以上の説明内容に対し、内容の過不足はないか。
各委員　：意見なし。
委員長　：第 3 回目の議事録と振り返りについては、承認いただけたとのことで承った。

3．素案（修正案）の検討（意見交換）

委員長　：それでは、「富田林市文化芸術振興ビジョン（修正案）」について説明をお願いします。

■修正案「第 2 章」の主な修正の説明／事務局説明

【第 2 章の質疑応答】

委　員　：前回の議論で出ていなかった、大阪万博の内容と SDGs の内容が追加されているが、これはビジョンの策定に関係ないのではないか。文化芸術振興ビジョンは富田林のオリジナルを出すものであり、主旨から逸れているのではないか。また、舞洲地域の写真が掲載されているが、ここは大気汚染の酷い場所である。このエリアを推奨

する様な形で文化芸術振興ビジョンに掲載することは委員として恥ずかしいので削除して欲しい。

SDGs は全部で 17 項目あるが、富田林でこれら全てを網羅できるとは到底思えず、現実味がないのではないか。いくつかの項目を挙げて取組むという姿勢ならいいが、記載のある 4 つの項目については漠然と SDGs への貢献として取りあげられており、違和感がある。

また、カタカナ表記が多く、記載内容が理解できない部分があった。

11 ページについて、「文化を推奨する」と言っているにも関わらず、市は新たに予算や人を支援しないと謳っている点が相反するように思う。市はどこを援助しようとしているのか。

「文化財を保護する」との記載がある点については良いが、加えて「文化財保護センターを保護する」旨の記載とその写真も載せていただきたい。文化財保護センターは管理人もおらず、資料館となっていないのが現状で、はたから見ると保管場所である。

林先生が行っている「ええとこ富田林」のイベントは、すばるホール事業団が実施している振興事業の一環であるので、掲載場所を適切な場所に移してもらいたい。

14 ページの文字の誤りについてであるが、市民舞踏会ではなく、「市民舞踊会」である。日本舞踊は伝統文化であると思っているが、なぜ伝統分野に入らないのかが疑問だ。

委　員　：18 ページの文化資源について、市が実施しているもの、すばるホールが実施しているもの、市民が行うもの、色々混ざっている様に感じた。実際に誰がこれらの取組を実施していくのかを整理した方が市内の活動の実態が分かるのではないかと思う。現状では取組を行う主体が分からない。

委　員　：この冊子は最終的に誰の目に留まるのか。

事務局　：大阪万博についてであるが、記載の経緯を説明したい。ビジョンの構成として、国の動向があり、次に大阪府の動向があり、また大阪府の中で富田林市の動向があるといった流れである。

大阪府の取組としては、文化関連の事業としてアーツカウンシルや大阪万博の件を取り上げている。大阪府の動向に沿って、富田林市の文化ビジョンを策定している側面もあるため、それらを無視することはできないと判断している。舞洲地域の写真について、場所のイメージは個人によって意見は様々であるが、現状はこれを採用している。

SDGs については、富田林市が策定しようとしている文化芸術振興ビジョンの上位計画に富田林市教育大綱というものがあり、その教育大綱の上位計画に、総合基本計画（総合ビジョン）がある。そのビジョンの中で SDGs の記載があるので、これも無視することができない。SGDs の 17 項目のうちどれに該当するのかについては、今検討中である。現段階では記載の 4 つを提案している。

11 ページについては、誤解を招きやすい内容になっているかもしれないが、公民連携の条件的な内容が記載されている。ここに記載している内容は、文化振興についてではない。一般的には、公民連携を行う上で、「民間に新たな税金の投入や人員の配置は行わない」という発想である。つまり、文化に対してお金を使わないという意味ではなく、「公民連携に関して新たに予算は使わない」という意味を項目（記載）となっている。

委　員　：では、公民連携の推進についてはこの素案の内容に必要ないのではないか。

事務局　：公民連携の計画は上位計画ではない。しかし、文化芸術の振興において、公民連携の促進は必要であると考えている。

次に、取組の主体についての質問に対する回答であるが、前提として主体を明確に項目分けすることが難しい。我々は、文化芸術の振興は行政が先導して活動していくものではなく、市民の活動をバックアップしていく姿勢が大切なのではないかと考えている。実際に、他市でも、自治体だけで動かしている文化芸術振興というものはほぼない。誰が主体として動いているのかについてはまた議論できればと思う。

委　員　：大阪万博についてであるが、この素案では大阪万博の紹介で留まっているので、文化の側面で大阪万博と富田林がどのように繋がるのかを理解することは一般の市民にとって大変難しいと思う。大阪万博は「命」や「SDGs」といったテーマで開催されるが、「富田林が大阪万博のテーマを上手く活用するにはどうすればいいか」や、「富田林の文化を大阪万博でどのように発信していくか」といったことについて記載すればいいのではないか。万博と富田林の文化の繋がりといった点で書き方の工夫が必要だ。

委員長　：大阪万博について、このビジョンは 10 年間のビジョンであると思うが、大阪万博が終わる 2 年後（2025 年）以降も、引き続きその内容が 8 年間晒され続けることを考えると、ビジョンに載せなくてもいいのではないか。

：SDGs について、個人的な意見であるが、「パートナーシップで目標を達成しよう」の項目を記載すると、責任を問われるので、相当な覚悟が必要であると思うが頑張っていただきたい。

次に、公民連携についてであるが、ここに記載するとこの項目が独り歩きする可能性があるので、１～6 の項目は記載しなくてもいいのではないか。市民からすると、公民の「民」は企業ではなく「市民」を示す。この箇所については花柳委員の意見に賛成である。

活動の主体について、整理の仕方は皆さんと議論したい。団体と活動が百花繚乱になっているので、書きぶりの整理が必要な気がする。

委　員　：私は文化団体協議会の代表として、より多くの市民に文化を楽しんでもらえるようにすることを目的にこの委員会に入っている。このビジョンの冊子は、どの範囲の人の手元まで届くのか。たとえば、教師であれば学習指導要項のようなものがあり、要項が子どもに伝わるために、教師が手本を見せる必要がある。隅々の市民にこの冊子が届くのであれば心配はないが、そうでは無いと思うので、冊子に変わる何かが必要であるのではないか。教師がいない現状で生徒（市民）に誰がどのように伝えるのかを考える必要があるのではないか。この構造を問いたい。

委　員　：文化活動については記載があるのに、文化財についての詳細な記載がないのはなぜなのか。例えば、アケボノゾウや小板橋など、日の目を浴びない文化財にも焦点を当てて表記してもらいたい。

委員長　：各文化財については、別途策定されている「文化財保存活用地域計画」に記載されるものではないか。本日配布されている参考資料は文化庁が作成しているものだが、富田林市には文化資源をまとめている部署はないのか。

事務局　：文化庁の方針に基づいて、富田林市の計画も 3 年計画で作成している。

委　員　：消滅している文化財も沢山ある。明確に明記してもらいたい。

委員長　：然るべき部署に対応していただきたい。

3 章以降について、大阪万博の記載や SDGs をどうするかについて、特に公民連携については慎重に検討していただきたい。

活動区分の仕方は、施設・団体・活動といったようにカテゴリを分けるか、または行政と協働して実施している等の関わり方を記載してもらいたい。現在の記載方法では、市が民間の手柄を横取りしたと誤った認識を与えかねないため、検討していただきたい。

子ども・福祉・国際交流については記載されているので良いと思った。
推進体制について、事業団が大切な存在であるといった前回の委員会であがった声が、誠実に課題として明記されていた点は良かった。これで承認いただいてよいか。

委　員　：今年、指定管理者を公募する年であるが、富田林のオリジナリティを持って、非公募にするべきであると思う。

委員長　：今はその話をする時間ではないので控えていただきたい。

委　員　：岡委員の意見についてであるが、この冊子は市民も見られるようになるのか。

事務局　：もちろん、見られるようになる。また、市の HP にも載る予定だ。概要版も作成する。ただし、全戸配布は考えていない。文化に関連する施設には配架するか検討中だ。

委　員　：ビジョンの全てに目を通すには相当なエネルギーがいる。身近にアクセスできる様に概要版は是非作成した方が良い。

委　員　：市民代表として見た時に、富田林の内容は興味があるので読めるが、12 ページのような「対象施設」等の話になると興味がないので読まない。この部分は付録で最後に付けてもいいのではないか。読み物として読みやすい様に工夫が必要である。資料の着地点が分からない。

委員長　：行動指針を示すのは行政の役割である。内容について市民が意見を言えるような資料としてまとめる必要がある。

委　員　：正直、「はじめに」から読みにくいと感じる。
自分たちが身近にアクセスできるようにした方がいい。

委　員　：全戸配布が難しいことは承知したが、富田林市の広報誌にせめて 1 ページ、「富田林市文化芸術振興ビジョン策定委員会」を実施したことについての記載をして欲しい。広報の仕方によっては、市民に「文化の話を議論しているんだ」と思ってもらえ、このビジョンが市民の手に届くと思う。加えて、市民に「文化芸術をもっとしよう」というメッセージを届けて欲しい。目的はそこにある。ひいては、文化活動を行う人が増える様に仕向けて欲しい。

委員長　：「はじめに」の文書について、市のメッセージとして「こんな町を作ろうとしている」という結論を冒頭に持ってきてもいいのではないか。方向性を先に示した方がいいのではないか。

委　員　　：言葉について、「文化をそだてる」が「文化芸術をそだてる」になっていたり、「そだてる」がひらがなのところや漢字のところがあるのが気になったので、統一して欲しい。

■修正案「第 3 章」の主な修正の説明／事務局説明

【質疑応答】

副委員長　：数字目標 35%の根拠がどんなものなのか。

アーティストを派遣し文化芸術を繋げることが数値目標になっていたが、これは数値目標ではない様に思う。文言が、1、2、3 を通して数値目標ではなく、単なる「目標」という言葉になるのではないかと感じた。

3 の「文化芸術にふれる」について、10%に下げることを目標としているが、下げる目標ではなく、数値を上げる目標にした方が分かりやすいのではないか。

委　員　　：焚火についてであるが、「火」という言葉は絶対に使ってはいけない。良い火もあるが、危ない火もあり、特に飛び火は危ない。また、「あたたかい」の漢字は「温」が妥当だ。文化は豊かな心を寛容するものであり、心の財産を積み立てていくことだと思う。心は目に見えないものなのに、目に見えるもので表現するのはどうかと思う。

委　員　　：スローガンについて、なぜこのスローガンになったのか。私の好きな言葉はドイツ文化センターが出している文言で、「Sprache. Kultur.」である。このドイツ国立の文化センターは「文化」と「人が話すこと」を両立させている場所であると謳っており、訪れるとそれを肌で感じ取ることができる。このように、もう少しコンパクトに、かつ目的を明確に、分かりやすくした方が良い。ただし、スローガンはある方が良い。スローガンに至るまでの経緯が知りたい。

委員長　　：頭に「人と人とのあたたかい結びつきによるコミュニティがどんどん広がっていくことを目指して」という言葉が書いているので、「温かい結びつき」等、背景や目的を考慮して再考したほうがいいのではないか。

副委員長　：恐らく、火を用いたのはビジュアルイメージを持ってきたかったのではないかと思う。言葉でも分かり、絵を見て理解できるのでその点は良かったが、火は検討が必要だ。

委　員　　：各章において、キャッチコピーが沢山出てくるので、一つに絞ったり、関連性をもたせることができれば分かりやすいのではないか。

委　員　　：「そだてる」や「つなげる」について、具体例があれば分かりやすい。

委　員　　：沢山キャッチフレーズがあるが、私の人生で「人がきらめく、自然がきらめく」は見たことがあるが、他のものは見たことがない。統一感があった方が富田林だと分かっていい。「楠」については、分かりやすくていい。最後に持ってきてもメッセージがあっていい。

■修正案「第 4 章」の主な修正の説明／事務局説明

【質疑応答】

副委員長　：4 章はボリュームが多く、沢山の項に分かれているので、目次にも「項」の項目を入れた方が「ふれる」「そだてる」をイメージしながら本文を読むことができるのではないか。他の章も該当するのであれば適応していただきたい。

委員長　　：他の自治体でも「ふれる」「そだてる」等の文言は使ってそうであるが、そこを踏み込んでいる点は富田林らしさと捉えられるのではないかと思う。

副委員長　：読みにくいと感じたことがある。35 ページの（1）の後に黒ダイヤ（◆）を入れて、「アンケート結果」という題目があった方が良いように感じた。また、アンケートの概要についても詳細があればいいと思った。

委　員　　：情報が多すぎて、整理・理解ができない。

53 ページの情報発信の記載内容だけ、読んでいて「ふれる」の要素を感じ取れなかった。ここでは、情報の取り方をまとめ方がいい様に感じたがどうか。

また、コラムについて、富田林市で行われている取組みなのかどうかが分からなかったので、その辺りの情報を記載しておいた方が読み手は分かりやすい様に思う。

委　員　　：48 ページについて、「障がい者」と「健常者」という形で記載されているが、書き方に工夫が必要ではないか。「障がい」そのものが残酷な言葉であると思う。違う表現にした方がいいのではないか。

委　員　　：言葉の正誤確認であるが、37 ページの下から 4 行目「子どもが文化芸術をふれあう機会」と 2 行後の「子ども達が文化芸術をふれあう機会」が言葉の重複を起こしている。P45 の下から 3 行目の「まひづくり」は「まちづくり」である。

委　員　　：文化にふれるという観点から言えば、障がい者でも健常者でも関係ない。障がい者と健常者との棲み分けがそもそもあまり良くないように思う。障がい者の表現の仕方について、特別視する必要はない。

委　員　　：外国人の視点が入っていて良いと思った。「国際交流」はどちらかというと国と国の文化の交流を連想するので、地域の外国人と「多文化共生」という書き方を記載していただきたい。また、「人権」の言葉が 1 つ入っていて良かったが、もっと文化芸術に寄与していることが伝わる内容であれば、なお良いと思った。多文化共生の視点がもっと入っていればいいと思う。

委　員　　：53 ページの地域の誇りと思う資源について、すばるホール内にあるプラネタリウムの存在は大きいと感じている。本来はもっと市民にアピールされるべきはずのすばるホールのプラネタリウムが尊重されていないのが現状だ。ビジョンの内容について話している訳ではないので、話の次元が違うかもがそのような現状があることをここでは伝えたい。

委員長　　：コラムの書きぶりと位置づけについて、はまっているものとそうでないものがあるように感じた。40 ページについては「つなげる」に関係ない様に感じる。ここでは、アーティストバンクの話をした方がいいのではないか。またコラムは主観的に書かれているケースが多い様に感じる。例えば 48 ページのコラムでは、「こんな簡単そうなことができていないのが現状です」といった文章も主観的な表現で、読んでいてドキッとする。表現として危ない様に思う。福祉の方の確認を貰った方が適切な表現に変わるのではないか。主観や感情が入り過ぎた表現は控えるようにした方が良い。

委　員　　：48 ページのコラムはいらないのではないか。障がい者を被害者の様に書かれていると感じる。

委　員　　：47 ページの（５）について、「文化格差を無くす心のバリアフリー」という表現があるが、「文化格差」という言葉はどうなのかと思った。格差を無くといった前提がいる入口として違うのではないか。表現に棘を感じる。芸術の感じ方は心の感じ方なので、その辺を尊重した方が良いのではないか。

委　員　　：バリアフリーの視点から考えると幅広い範囲において市が行うべき取組みである様に感じるが、高齢者や障がい者に焦点を当てて何かを行う行為はどうかと思う。高齢者や障がい者はベビーカーを押している人と同等である。

委　員　　：「格差」という表現がおかしいのではないか。ビジョンに記載すると文化格差があることを暗示している様にも捉えられてしまう。当事者が「そうではない」と言っても、周りの人が慮り、その思想が独り歩きしてしまう。

委員長　　：この点はデリケートな部分なので別の機会で決めたい。

委　員　　：コラムについて意見がある。市民文化祭に関して、「お客さんが来ない」との内容が記載されているが、この部分について、「市民文化祭のパフォーマンスの質を高めるためにアーティストバンクの連携を進めていて、集客できるように試みている」など、集客まで考えた生産性のある内容を記載しなければならないのではないか。「連携させていく」等の将来におけるポジティブな方針を記載しなければ、市民に現実を突きつるだけでは何も起こらない。具体的な取組み内容を記載する必要があるのではないか。

委　員　　：市民文化祭に関して統計を取ったことがあるが、出演者に対して平均 40 人程度の集客である。

委　員　　：知り合いのみをお客さんとして集客するのは問題だ。内容のアピールをするべきではないか。自分たちが楽しむために文化芸術をしているというのはなんのアピールにもなっていない。質を高めることは重要であり、知り合いだけを集めて満席になって喜んでいるだけでは文化活動をするとしても、もったいない。

委　員　　：35 ページの文言について、「子ども達のきっかけを支援する」と「出会いを支援する」の違いが分かりにくい。この 2 つの視点で支援していることを明確にするべきだ。支援のあり方を検討して欲しい。

委員長　　：時間を延長して欲しい。

■修正案「第 5・6 章」の主な修正の説明／事務局説明

【質疑応答】

副委員長　：一個人の要望になってしまうが、60 ページの評価体制について、年一回程度の PDCA サイクルに基づく評価と 5 年経過時のビジョンの見直しについて記載されているが、例えば教員であれば、年間の計画を考えて、次に月の計画を考え、週案、日案、といった流れで考えていく。ビジョンは 10 年間という大きなスパンの計画がある一方で、5 年計画や 3 年計画といったものはない。漠然とした 10 年間のビジョンを基にした理念や気持ちはあるが、具体的に遂行するプランが全くない状態である。細かい計画が現時点ではない。これを作るのかどうかまず問いたい。もし作らないのであれば、10 年後の成果を判定しにくいのではないかと思う。もし、10 年計画を遂行するのであれば、5 年計画や 3 年計画も作成していただきたいと思う。

委　員　　：ビジョンの策定だけであれば、自由に発言して終わってしまう。計画まで作らないと責任を持ったことにはならないのではないか。

事務局　　：1 年毎の進捗状況を報告するシートを作成することを検討している。

副委員長　：そのチェック表は年度の初めに、「1 年間の目標はこのくらいだ」というものを予め打ち出し、1 年経った時点で評価するものなのか。

事務局　　：1 年間の目標を明確に打ち出せるかどうかは分からないが、文章の中で具体的な事業を列挙して、「目標年度までにこれをする」というような目標を作って評価する予定である。

委員長　　：評価指標の基準はここに載せていただきたい。また、委員会でも提示して欲しい。評価指標の作成は簡単なことではないので、委員会を設置する、もしくは専門家の意見を取り入れて作成して欲しい。

事務局　　：評価指標の作成は職員のみで作成する予定はない。また、評価委員会は年 1 回どこかのタイミングで実施できればと思っている。

委　員　　：61 ページにおいて、基金以外の民間からのファンドレイジング的な要素を持つ寄附について、具体例があるので紹介する。京都信用金庫とベイスが共同して行う事業に、京都市がバックアップとして入り、大人でも子どもでも参加できる芸術の学校を開いている。最終的には、京都市が行う公演事業に関わって、3 年後に 3 億円程度かけて野外の事業を行うことを目標としている。このように集まった企業に対して市役所がバックアップとして入るケースがあり、その様な場合は企業が前方で稼働するため、大きな動きに発展することが多い。私達が行う演劇は市民で実施することを基本として考えているが、それを全て市に押し付けることはできないため、一般企業からの力を借りながら官民一緒にプロジェクトを動かしていくといった税金のみに頼り切らない方法は今後期待される。この方法は、アメリカ的な考え方でもあり、メトロポリタン会議所で行うオペラのプロジェクトもこのように寄附で賄っている。文化庁も予算の削減をしきりに発言している中で、税金に頼った文化活動は不可能になっている。市は企業との連携を見直し、いまどのようなバックアップの仕方が必要かを把握することに努めて欲しい。舵の切り方として、「税金頼みでは厳しい」と言うのがフリーの演奏家としての一意見である。企業の募集を市がやるなど、できることはあると思う。

委員長　　：手を挙げてくれる企業を集えたらと思う。

事業団　　：60 ページの「ビジョンの推進に向けて」のスキームについて、気になる部分がある。素案からは市と指定管理者が毎年度の事業計画

を策定するといったように読み取れるが、何らかの手当無しに、現状のまま頑張って欲しいと言われると現実的に厳しいものがある。実現するためにはどうすれば良いか。

委員長　：予算や人件費についての話は、本委員会で話す内容ではないと思うが、意見を述べたい。市は指定管理の方針を仕様書内にやって欲しい業務として書かざるを得ない部分がある。しかし、記載するのであれば、実施できる予算とその根拠を示した上で明示していただきたい。予算が 10%減らされている中で、要望だけを伝えられても、現実的ではない様に思う。やってもらう人に優しくないのはどうかと思う。

委　員　：すばるホールによく行くので事業団のことは良く知っているつもりでいる。事業団は学校教育の中にも入り込んでやっている。学校は予算があまりないので、プラネタリウム等にも行けなくなっている。このような状況であるので、すばるホールがプラネタリウム等の金額を負担しているそうだ。本来は市が予算補正する必要があるように思う。それにもかかわらず、今は予算を削る方向に進んでいる。事業団は指定管理だけを事業費としてもらっているが、文化芸術振興については予算を貰っていない。この様な状況は気の毒だ。

委員長　：この委員会で予算に踏み込んで議論するのは、少し違うかもしれないが、ビジョンの実現を願う委員としては、疑問の声は議事録に残してもらいたい。

委　員　：市の職員も年度によって変わるので、安定した期間で専門的なことをしてもらいたい。

副委員長：リ―ディングプロジェクトという大きな目標があって、主な施策等があるのではないか。単刀直入に言うと、5 章と 4 章が逆ではないかと思うがいかがか。

委員長　：若者及び市民の声としてはどうか。

委　員　：5 章と 4 章が逆でもいいと思う。こちらの方が自然であるように思う。ただし、ビジョンの結論が見え辛くなる可能性がある。

委　員　：5 章と 4 章は逆でもいいと思う。

委員長　：意見として受け止める。

委　員　：60 ページについて、事業計画は市（生涯学習課）または指定管理者（すばるホール）が基本計画を立て、計画を実行し、事後評価することになると理解している。我々は文化団体協議会や市民文化祭にも実質的に関わっている身であるので、基本計画や計画の実行

には関与していない。本来、計画を実行する中の人間であるので、基本計画を作成することや計画を実行させる人間ではない。その様に考えると基本計画の作成や計画の実行は誰が推進していくのか。

事務局　：基本計画を作成するのは、基本的には市の文化振興担当課である。そのために、文化振興担当課の推進体制の強化も進めたいと思っている。それを踏まえた上で、実施主体としては、文化団体協議会やすばるホールも関わってもらうことを想定している。基本計画を作っているのは市であることには間違いない。

委　員　：現状、私は文化団体協議会を引っ張っていく立場ではないと認識している。文化団体協議会に降ってきた基本計画や計画実行は市の意向であると捉えたい。

委員長　：これにて策定委員会は終了する。

4．今後のスケジュールについて

事務局　：4 月 1 日から一か月間、パブリックコメントを実施する。市民から頂いた意見は事務局で検討して、その結果を 5 月に実施予定の最終の委員会で皆さんに報告したい。

委員長　：修正内容に関しては会長に一任させるとの記載があるが、この点に関しては後ほど調整させていただきたい。ありがとうございました。

（以上。）